あなたが選んだのは私ではありませんでした

裏切られた私、ひっそり姿を消します

矢野りと
Rito Yano

Regina BUNKO

Character
ミン団長
ルシアナの住む町の騎士団長。おおらかな性格で、みんなを温かく見守っている。
レオン
サーシャと元婚約者の子供。ブルーガ伯爵家の跡取りとして育ち、賢く年の割に落ち着いている。
サーシャ
アザキオの先輩騎士の元婚約者。彼が殉死したあと、とある事情のためアザキオの婚約者になる。
ハルサ
ルシアナとアザキオの子供。ルシアナに愛されて真っ直ぐに育った母親思いの優しい子。
アザキオ
ブルーガ伯爵家の当主。魔力を持ち、巡回騎士団の副団長を務める。誠実で責任感が強く仲間に慕われている。
ルシアナ
魔道具調整師として働く、この物語の主人公。優しく、芯のある性格。アザキオとの別れをきっかけに街を出るが十年後、彼と再会してしまい――!?

目次

あなたが選んだのは私ではありませんでした　7
裏切られた私、ひっそり姿を消します
書き下ろし番外編
守るために堕ちる　357

あなたが選んだのは私ではありませんでした

裏切られた私、ひっそり姿を消します

第一章　残酷な別れ

私――ルシアナは、恋人であるアザキオ・ブルーガに呼び出されて、待ち合わせ場所へ向かう。最近忙しかった彼と会うのは久しぶりで、私の心は弾んでいた。彼が選んだ、初めて行く街のはずれのお店には、知り合いは誰もおらず、私と彼は奥の席に座る。

「なかなか素敵なお店だわ。ありがとう、キオ。連れてきてくれて」

「あぁ……」

彼はそう言ったきりなぜか口を閉じてしまい、向かい合って座る私と目を合わせない。

私を見ていない、そんな気がした。恋人のそんな態度に、言いしれぬ不安を抱く。

……キオらしくないな。

彼と付き合ってから二年が経とうとしているけれども、こんな彼を見るのは初めてだった。

私達の出会いは、魔力持ちの騎士であるキオの剣の調整を任されたのが始まりだ。

そもそも、この国には魔力を持っている人が一割ほどいる。

魔力とは、おとぎ話に出てくる魔法のように便利なものではない。あくまでも、その人の特性でしかなく、磨かなければ意味がないうえ、活かせる仕事も騎士や魔道具調整師（せいし）などに限られる。それに騎士になるのに魔力は絶対に必要というわけではなく、魔力を持たない騎士のほうが圧倒的に多い。

ただ、魔力持ちの騎士は、剣の強度や速さを増幅させることができる。

そして、魔道具調整師は、彼らが扱う剣などの武器を調整する。武器の内にある、魔力の通り道を整えるのだ。その作業はとても繊細で難しく、便宜上通り道と言っているが、もちろん目に見えるものではない。当然、遺伝するものではないうえ、魔力があれば誰でもできるというものでもない。

幸いなことに私には適性があった。両親を早くに亡くし、頼るべき親戚もいないので、手に職をつけることができたのは本当に幸運だったと思う。

キオと私は、騎士と魔道具調整師として会話を重ねるうちに、自然と惹かれ合い、彼が告白してきたことをきっかけに、恋人としてのお付き合いが始まった。

両親を幼い頃に亡くしたキオは叔父に育てられ、法律で継承が認められる十歳の時、

後見人を叔父として正式にブルーガ伯爵位を継いでいた。
彼は貴族で、私は平民という身分の差。今でこそ法律で貴族と平民の結婚も可能となったが、実際には身近な人に反対されることが多い。しかし、私達は反対されることはなかった。
キオの後見人である叔父が、私を受け入れてくれたからだ。以前会った時に、叔父は好きな人と結婚するのを諦めたことがあると寂しそうに話していた。その過去が大きく関係しているのだろう。さらに、キオが騎士を務められるのも、今でもブルーガ伯爵家の実質的な仕事を叔父が支えているからだと聞いている。
そうして、ふたりの間に芽生えた淡い恋を、二年という月日が確かな愛へと変えた。お互いにはっきりと言葉にはしていないけれど、生涯を一緒に歩んでいくだろう。もちろん、アザキオも同じ気持ちだと思っている。それを疑う理由なんて、私達の間にはない。

「キオ、どうしたの……？」
心配になり尋ねたが、彼は黙ったまま。
もともと口数が多いほうではないけど、ここまで黙りこむことなんてなかったのに。

いつもと違う様子に心配になり、もう一度問いかける。
「キオ、大丈夫？」
「……大丈夫だ」
私から目を逸らして俯く彼を覗き込む。
どうしてそんな顔をしているの……キオ。
言葉少なに呟く彼の表情は、悲しそうだとか苦しそうだとかそんな単純な言葉で言い表せない。彼は視線を下に向けたまま顔を上げ、声を絞り出すようにして話した。
「すまない……別れてほしい。アナ」
「……っ……どうして……？」
言葉を詰まらせながらそう呟く。なぜ彼が突然そんなことを言うのか分からない。
ただ、最近の彼が以前とは少し違うことには気づいていた。それは彼が変わったのではなく、彼の周りに変化があったのだ。
一ヶ月ほど前の任務でキオが慕っている先輩騎士――レオンが仲間を庇（かば）って命を落としたと聞いた。その騎士と結婚間近だった婚約者――サーシャは、愛する人の突然の死を受け入れられず憔悴（しょうすい）してしまい、騎士団の人達がそんな彼女を親身になって支えていた。

そんな中でもキオは、少しでも時間があれば彼女のもとに通っている。彼は先輩騎士の死に特に責任を感じているように見えたから、もしかしたら庇った仲間とはキオのことなのかもしれないと思った。でも彼に直接そのことを尋ねてはいない。

言ったら楽になるのなら、彼から話すはずだ。言わないということは、心の整理ができていない、または触れられたくないということなのだろう。

彼のしたいようにさせてあげたい。それで少しでも楽になるのなら……

悲しみや心に負った傷をどう消化するかはその人によって違う。彼にとって、この時間は必要なものなのだろう。

精神的にまいっている彼女を助けようとする彼の行動を疑わなかった。

しかし時間が経ってもサーシャのそばから、キオが離れることはない。

彼女もそんな彼を頼りにしているのだろう。援助を断る様子はない。「もう大丈夫だから」と彼女が言ってくれればと、心の中で何度となく願ったけれど、それを私が言葉にすることはなかった。

……言えないわ。傷ついている人にそんな残酷なことは……

もし私が彼女だったら、同じようになっていたかもしれない。

ふたりの距離に不安を感じないといえば嘘になる。彼のことを信じていても、やはり

気分のいいものではない。

心の中では、もうサーシャの面倒を見るのはやめてと叫んでいたけど、そんな思いは彼には隠していた。私は自分の不安を和らげるのではなく、キオの心に寄り添いたかった。

だからこそ、私は理解のある恋人でいた。

それはサーシャのためではなく、愛するキオのためだった。それなのに……

「亡くなった先輩の婚約者を知っているだろう？　……これからは俺が、サーシャを守っていくつもりだ。お腹の子には父親が必要だから」

キオは、目線を合わせないまま私に告げてくる。

サーシャのお腹に亡くなった騎士の子がいるのは、周知の事実だった。

先輩騎士は貴族で、彼女は平民だったので、彼の家族は結婚を反対していたらしく、ふたりは結婚するために既成事実を作ったと聞いている。でも、もう彼女はお腹の子の父親と結婚できない。

キオがお腹の子の父親になるということは、つまり彼女と結婚するということ。

「キオは責任を感じているからそんなことを言うの？　ひとりで背負おうとしないで！　どうすれば彼女を助けられるか一緒に考えましょう。あなたが犠牲になるのではなく、

もっと他に良い方法があるはずよっ」
こんな方法を選ばせたかったから見守っていたわけじゃない。キオに寄り添いたかったから、彼の気持ちを大切にしたかったから、口を出さなかっただけ。
キオ、キオ……お願い、私を見て！
「……これしかないんだ」
苦しそうな表情を浮かべ、そう言うキオ。
そんなはずはない、サーシャは亡くなった婚約者を今も愛しているはず。だからこそ落ち込んでいるのだろう。こんな形はきっと望んでいない。
そう信じていたからこそ、否定の言葉を叫ぼうとした。
「そんなことな――」
「アザキオ様……」
私の言葉に被せるように儚げな声で彼の名を呼ぶ、サーシャがいた。
私の目にはキオしか映っておらず、彼女がそばに来ていたことに全く気づかなかった。
いつから近くにいたのだろうか。
いいえ、それよりも今はもっと気になることがある。
彼女はブルーガ様ではなく、アザキオ様と名字ではなく名を呼んだ。

いつから呼び名が変わったのだろうか。私が知っている限り、彼女はキオのことをブルーガ様と呼んでいた。それは、親戚や友人でもない婚約者の同僚という立場に相応しい呼び方だった。それが今は名を呼んでいる。まるで当然のように……
――とても嫌な感じだった。
「どうしてここに来たんだ……」
「だってアザキオ様だけの問題ではないもの。これは私達ふたりの問題でしょう？　だから来てしまいました」
ここに来たのはサーシャの独断のようだが、この場所を知っているということは、キオが私と今日ここで会うことを彼女に教えたのだろう。
彼女は私とキオの関係を知っているはずだ。そのうえでこの場に乗り込んできて、自分とキオを指し『私達ふたりの問題』と発言したことに明らかな悪意を感じる。
爪が食い込むくらい強く手を握りしめた私とサーシャの視線がぶつかる。
次の瞬間、彼女は、まだ膨らんでいないお腹に手を当てながら、立っているのは少し辛くてと言い、そこに座るのが当たり前だと言わんばかりに、キオの隣にすっと腰を下ろした。
唖然とする私を前に、彼女は微かに笑みすら浮かべている。

何回か挨拶を交わした程度で、彼女と直接話したことはない。だからキオから聞いたこと以上のことは知らない。

――婚約者を失って、悲嘆に暮れている可哀想な人。

彼女の境遇に同情していたし、できることがあれば力になりたいとも思っていた。

でも、今はとてもじゃないけれど、そんなふうには思えない。彼はこんな人を好きになったというのだろうか。やはりそうは思えない。とにかくキオとふたりでちゃんと話し合いたい。話せばきっと……

「キオ、私はあなたとふたりだけで話したい。さっきの言葉だけで納得するなんて到底無理だわ。もっとちゃんと話しましょう。これまでだって、いろんなことを乗り越えてきたわ。今回もふたりで乗り越えましょう。彼女は関係ない。……ここにいてほしくないわ」

キオだけを見てそう告げたが、この場から立ち去ってと遠回しにサーシャに伝えたつもりだった。だが彼女は立ち去る素振りを見せない。

そんな様子を見かねてキオがサーシャに告げる。

「……アナとふたりだけで話したいんだ。だから席を外してくれないか」

だが彼女は彼の言葉を聞き入れず、私にとって聞き流せない嫌な言い方を重ねる。

「でもアザキオ様との関係を私が伝えたほうが、分かってもらえると思うの――」

「ふざけないでっ！　これは私とキオの問題だわ。あなたが大変なのは理解している。でもだからって彼が、あなたとお腹の子の面倒をこんな形でみるのは間違っている！」

気づけばサーシャの言葉を遮って叫んでいた。彼女の境遇が困難なのは間違いないけれど、責任を感じているキオに、自分とお腹の子を背負わせるのは違う。そんなのは誰も幸せになれない。

「何も間違っていないわ。アザキオ様は、すべてを承知の上で、私のそばにいたいと望んでくれたのよ。あなたとの関係を終わらせて、私との未来を選んだの！　……あなたには悪いと思っているわ、でも人の気持ちを縛ることなんてできないのよ。彼の気持ちを尊重してあげて」

まるでキオが、私からサーシャに心変わりをしたような言い方だった。

でもそれは、彼女の言葉。彼はきっと違うはず。愛ではなく、先輩の死に対する負い目から彼女のそばにいようとしている。彼を信じているから、彼女の言葉になんて惑わされない。そうよね……、キオ。

「キオ、私は――」

「彼女の言う通りだ、俺は君との未来ではなく彼女を選んだ。本当にすまない。別れて

くれ、君とはもう一緒にいられない。ルシアナ」

彼は私に話をさせなかった。もう私を愛称で呼ぶこともしない。ただのルシアナと呼ぶ声にもう温かさはない。彼の決断が揺るがないことだけが、はっきりと感じられた。それがどんな想いからだとしても、もう結果は変わらない。彼の目は、決めたことを覆さないと言っている。

――そのことが分かってしまった。

二年も彼の隣で、その眼差しを見続けてきたのは、他の誰でもなく私なのだ。

それでも彼に言葉を紡ごうとする。縋(すが)っているのではない。彼のことを心から愛しているから、そうせずにはいられない。

「キオ、あなたの選択は自己満足だわ。いつの日かきっと後悔する。この選択は、あなたを苦しめることになるわ。本当にそれでいいの……？　私はあなたに苦しんでほしくない」

「今はこの選択しかできない」

すぐさま彼はそう言い返す。でもその顔は幸せとはほど遠い。

「……もう……私を愛していないの？」

もしも愛していると言ってくれれば、私は……あなたを待ち続ける。たとえ、今は彼

女を選んだとしても。

私はキオを愛しているから。

彼がまだ私との未来を少しでも望んでくれるのなら、私はどんな状況も受け入れる。だから言って、愛していると。

「……すまない」

彼は言わなかった。そんな彼の隣で、サーシャは安堵(あんど)の表情を浮かべながら、まるで彼に選ばれてごめんなさいというように頭を下げてくる。

……終わりなのね。彼の隣にいるのはもう私ではない。

「……さようなら、アザキオ」

――カタンッ。

私は立ち上がり、震える声で別れの言葉を告げる。それ以上口を開けば、泣いてしまいそうだから、歯を食いしばって、必死で堪えてふたりの前から去った。

気づいたら家に着いていたが、自分がどうやって帰ってきたか覚えていない。

私は今日、愛する人を失った。

その現実に、心が悲鳴を上げ続けている。慰めの言葉も、何もかもいらない。今はただ、放っておいてほしいだけ。とにかく胸が苦しくて、何も受け入れられそうにな

かった。

彼らの邪魔をするつもりはないが、祝福などできない。寄り添うふたりを見たくないから、ここから離れたい。

だから、私はこの住み慣れた街から出ていくことを決めた。私を引き留める家族は、もうこの世にはいないから迷うこともない。明日にでも「遠くに住む親戚が病気だから、しばらく手伝いに行かなければならない」という理由を告げて仕事も辞めよう。親しい友人達は、みなアザキオの知り合いでもあるから、誰にも行き先を告げずに、十七年間住んだ街から去ることにする。

いいえ、違う。行き先なんてない。だから、告げる場所なんて私にはなかった。

そして、私はひっそりと姿を消す。それが今の私にできる唯一の選択だった。

生まれ育った街を出た私は行くあてもなく、ただただ遠く離れた辺鄙（へんぴ）な土地を目指した。給料のほとんどを生活に充（あ）てていて、蓄えは雀の涙ほどしかなく、快適とはほど遠い旅。何度も心が折れそうになったけれど、死にたいとは思わなかった。

私のこの命は、愛情を注いでくれた両親が授けてくれたもの。だから、どんなに辛いことがあっても、命を粗末にするなど考えられない。

生きていると、どんな状況でもお腹は減る。倒れて誰かに迷惑をかけたくなければ、働かなければならない。私は道すがら旅の商人に雇われている護衛などに、魔道具の調整の必要はないかと声をかけ、僅かばかりの賃金を得て旅を続ける。

肉体的にも精神的にも余裕なんてない状況が、かえって良かった。今を生きることに必死だからこそ、それ以外のことを考えなくてすむ。

だから最後まで旅を続けられたのだろう。

たどり着いた土地は、地図に記されていないほどの田舎だったが、それなりに人が住んでいるところだった。

最初は縁もゆかりもないこの土地に来た私に、周囲の人は警戒心を露わにした。田舎だから余所者は珍しいらしく、そのうえ若い女性がひとりでなんて訳ありに決まっていると噂された。新参者が厄介事を持ち込まない人物か、人々は遠巻きに見定めようとする。

でも、それくらいは覚悟していた。そんなことは、どの土地でも大なり小なりあるものだ。私はここで暮らしていくと決めたから、後戻りする気はない。嘆いていても仕方がないから、とにかく自分ができることから始めた。

「こんにちは、ルシアナと言います。これからよろしくお願いします！」

誰に対してもにこやかに挨拶し、積極的に話しかけていく。そうするうちに周囲の人達は、だんだん私のことを受け入れてくれた。

警戒心が解けると、この土地の人達はみなとても親切だった。

「ルシアナ、ここで良かったら住みなよ」

「ありがとうございます！　でも家賃はおいくらですか……」

「心配しなくても大丈夫。若いんだから金はないだろう？」

そう言って顔馴染みになった八百屋のお婆さんは、古い空き家をタダ同然で私に貸してくれた。そして、仕事の斡旋所に行き魔道具調整師の仕事を探していたら、この町を守る騎士団を紹介してくれた。

「すまないが、正規では雇えない。調整の仕事がある時に、こちらに来て仕事をする形でお願いしたい。だが、その頻度も多くはない。それでも構わないか？」

申し訳なさそうに条件を告げてきたのは、面談をしてくれたミン団長だった。

「はい、大丈夫です。これからよろしくお願いします！」

「こちらこそよろしく頼む」

自分ひとりが生活していければ十分なのだから、多くは望まない。専属にはなれなかったけれど、それでも仕事に就けるのがありがたかった。

新しい土地に慣れて生活の見通しが立ってホッとした頃。

私は体調の変化に気づいた。突然起こる吐き気とだるさ……そして月のものがしばらく来ていない。いつもなら周期が狂っていることに気づいていたに違いない。

でもこんな状況だったから気づくのが遅れたのだ。それに、多少具合が悪くても、心労から来るものだと思い込んでいた。

えっ、いつから……？　まさか、そんなことって……

慌てて近くの診療所で診てもらうと「ご懐妊ですね、おめでとうございます」と医者が祝福してくれた。

……私はアザキオとの子を身籠(みごも)っていた。

驚きはあったけれど、戸惑いはない。まだなんの変化もない自分のお腹にそっと優しく手を当て、その中に芽吹いた命を感じようとする。

「ありがと……う、私のもとに来てくれて。何も心配はいらないからね、安心して生まれてきて……待っているからね」

自然と涙が溢れる。それは悲しいからではなく純粋な喜びからだ。愛する人を失ったけれど、大切なものが宿ってくれていた。今、私の心を占めているのは愛しいという想

いだけ。

「……本当に……ありがと……う……」

何度も何度もお腹の子に言葉を紡ぐ。自分の気持ちをちゃんと伝えておきたい。この命の芽生えを心から嬉しく思った。これからの不安など、それに勝る喜びが打ち消してくれた。

このことを、アザキオに知らせるつもりはない。私の中から彼への想いが消えたわけではないし、意地を張ってもいない。彼と育んだ歳月は私にとってかけがえのないもので、それは決して消えないだろう。

しかし彼は私ではない人を選んで、サーシャとお腹の子とともに新しい人生を始めている。今さら私が身籠(みごも)ったことを知らせても、その事実は覆らない。

それに私はこの子の存在を否定されるのが怖かった。告げれば責任を取らせてほしいと、アザキオは金銭的な援助を申し出てくれると思う。……無責任な人ではないから。

でも彼の言葉の奥に、困惑や負の感情を感じてしまうかもしれない。そんな人ではないと思っているけれど、彼にはもう守るべき者――サーシャとお腹の子がいるのだから、その可能性を完全に否定はできない。

人は守りたいものを前にして、どう変わるか分からない。それは誰しも同じ。

私だってこの子のためなら、なんだってできる。
アザキオに告げないという判断だって、彼の気持ちは考えなかった。
負の感情なんて、この子には感じてほしくない！　愛だけでいい、それだけを感じてほしいの。愛しい我が子の誕生を喜びだけで包んであげたい。
たとえ母だけだとしても、惜しみない愛情を注いで大切に育てると決心して、私はお腹の子をひとりで育てることに決めたのだった。
しかし、実際には私はひとりではなかった。大きくなるお腹に周りの人達も気づき、手を差し伸べてくれたのだ。最初こそは父親について聞かれたが、私だけの子ですと明るく言い切ると、それ以上、詮索してこなかった。

それから数ヶ月後、私は元気な男の子を産んだ。
「あらまぁ～、ルシアナにそっくりな子だねー」
誰もがそう言うほど、茶色がかった淡い赤毛も鼻や口元も母である私に似ている。
でも、目だけは吸い込まれそうな黒曜石の色だった。
――それは父親と同じ。しかし、彼に似ているのは瞳だけだった。
良かったと思った。アザキオに似てほしくなかったわけではないが、母である私に似

ているほうが誰かに余計なことを言われてこの子が傷つかずに済むだろう。
「愛しているわ、生まれてきてくれてありがとう」
そう言いながら、私は腕に抱く我が子に『ハルサ』と優しく呼びかけ、小さな額にそっと口づけを落としたのだった。

第二章　十年ぶりの再会

生まれ育ったあの街を離れてから、早いものでもう十年が過ぎた。
本当にあっという間だった。仕事と子育てを両立させる日々が忙しかったのもあるけれど、それ以上に周りの人達に助けられ充実した毎日を送っていたからだろう。
過去を忘れてはいないけれど、思い出す暇はなく、きっとそれは私にとって良かったのだと思う。
――たぶん、もう私の中では過去になっている。
いつものように台所に立って朝食の用意をしながら、寝間着を脱いで服に着替えている息子に声をかける。
「ハル、目玉焼きは半熟でいい？　それとも今日はしっかり焼く？」
「うーん、どっちにしようかな。よしっ、決めた！　お母さん、半熟にして」
朝から元気いっぱいのハルサは、もう九歳になった。見た目はまだ幼いけれど、しっかりしていると褒められることが多い。

でも、私にはまだまだ甘えてくる。以前甘えん坊さんねと何気なく言ったら、いじけてしまったことがあった。それからは、背伸びをしたい年頃である男の子の気持ちを傷つけないように気をつけている。
それに、子供が親から巣立ってしまう日は、いつか必ずやってくる。だから母としてはまだ当分の間はこの可愛い息子を堪能したい。
ふたりで朝食を食べ終えると、手早く戸締まりをして一緒に家を出る。
「ハルサ、いってらっしゃい。気をつけてね」
「はーい。お母さんもお仕事頑張って、ばいばーい」
ハルサは学校へ、私は魔道具の調整をしに騎士団へ行く。
この町には、七歳から十五歳までの子供が通う学校がひとつだけある。身分に関係なく通うことができるが、学ぶ内容が一般的な教養だけなので、高位貴族の子供のほとんどは大きな町にある貴族専用の学校に入学している。だから生徒の大部分は、平民や低位貴族の子供達で、のびのびとしていて、ハルサも毎日楽しく通っている。
そして私は、なるべくハルサに寂しい思いをさせないように、学校がある日を出勤日にしてもらっていた。
仕事場である騎士団に着き周囲に挨拶をしてから、早速仕事に取り掛かる。

この騎士団の中に魔力のある騎士は、数人しかおらず、調整のために預かっている剣は二本だけ。

そのうちの一本を手に取り、魔力の通り道を捉える。調整師の仕事は、刃を研ぐような力仕事ではないが、集中力をかなり必要とするため非常に疲れる。それでも私は、この仕事が気に入っていた。

入念に確認しながら微調整をしていると、騎士団のミン団長が声をかけてきた。

「仕事中にすまない。ルシアナ、ちょっといいか？　これを先にやってほしいんだ。うちの騎士のは、後回しでいいから」

作業の手を止めて振り返ると、団長は見覚えのない剣を握っている。どうやら急を要する剣の整備が入ったようだ。

「ええ、大丈夫ですよ。期限はいつまででしょうか？」

「しばらくこちらに滞在するようだから、いつも通りにやってくれれば大丈夫だ。でも、うちのよりは優先してくれ」

ということは、きっとこの剣の持ち主は、今この町に来ている巡回騎士団の一員なのだろう。

この国には、町ごとの常駐の騎士団と国内を巡っている巡回騎士団の二種類が存在する。双方の立場は違えど、互いに騎士であることは同じなので、何かあれば協力し合う。

町の騎士団は、その名の通り町の治安を守り、地域密着型で近所のおじさんやお兄さんといった親しみやすい雰囲気だ。

一方、中央から派遣されている巡回騎士団は、広範囲の犯罪や不正などに目を光らせ取り締まっている。仕事柄危険なことも多いので、必然的に引き締まった雰囲気を醸し出す。最近、若い子達が格好いい騎士達がいると、はしゃいでいたのは彼らのことだろう。凛々しい騎士はいつでもどこでも、女性達の人気が高いものだ。

「分かりました、ではお預かりし――」

その剣を受け取りながら、途中で言葉が途切れる。見た目は、なんの変哲もない剣だ。でも、それを手に取った感覚には覚えがあった。

――これはアザキオの剣だ。

剣を持つ手が震えそうなのを必死に堪える。魔道具調整師は仕事柄、一度触れた魔力の感覚をだいたい覚えている。当然、彼の魔力も知っていた。

間違えるはずがない。しかし、私の勘違いであってほしいと願ってしまう。

私は動揺を鎮めるために、それを机の上にそっと置き、懐かしい魔力からさり気なく距離を取る。そしてミン団長に気づかれないように、深呼吸をして平静を装う。

「ミン団長、この剣の持ち主の名前を伺ってもいいですか……」
「うーん、なんだったかな。ちゃんと聞いたんだが、出てこない。ちょっと待ってくれ、今思い出すから……」
魔道具調整師として、剣に関わることを知りたがるのはおかしくない。少しだけ声が震えてしまったけれど、幸いにも思い出すことに集中している団長は、そんな私の様子には気づかない。
「やっと思い出した！　確かアザキオ・ブルーガって名前だったな。伯爵位を持っているくせに、何年も巡回騎士団に入っているから、左遷されたのかと思ったんだが、どうやら違うらしい。自分から志願している変わり者らしいぞ」
「……そうですか。確かに変わっていますね、自ら志願なんて」
巡回騎士団の騎士の給料は良いけれど、その分危険な任務も多く、さらに国中を転々とするため、なりたがる人はそういない。でも適当な者を選ぶわけにもいかないので、それなりに優秀な騎士の中から、運悪く選ばれた者が一年ごとに交代で任務に当たっているのが現状だ。
極稀に志願する者もいるらしいが、個人的な事情を抱えた人が多いと聞いたことがある。前の職場で問題を起こしていづらくなったとか、浮気がばれて妻から家を追い出さ

れたなど、逃げ道として選ばざるを得なかったというところだ。
彼に何があったの……？
私の知っているアザキオは、責任感が強くて真面目で、言うべきことはちゃんと伝える人だ。問題を起こすような性格ではない。口が上手くはないけれど、それでトラブルになるほどでは、もちろんなかった。
しかし、もうあれから十年が経っている。十年という年月は、人を変えるには十分すぎる時間だ。彼は私が知っていた彼とは、もう違うのだろうか。
……いいえ、そんなことはないわ、きっと変わっていないはず。何か特別な事情があるのよ。ちゃんとした理由があるに決まっている。
頭に浮かんだ疑問を自ら打ち消す。それはまるでアザキオのことを庇(かば)うかのようで、そんな自分自身に戸惑ってしまう。彼と恋人だったのは、もう過去のことになっているのに、なぜ私はこんな反応をしているのか……
「うん？　どうしたんだ、ルシアナ。この剣の調整は難しそうか？　それなら俺のほうから断るから無理はしなくていいぞ。ハルサだっているんだ、残業なんてしなくていいからな」
ミン団長は、私の表情の意味を誤解しているようだ。

「大丈夫です、勤務時間内でできます。調整が終わり次第、団長のもとに届けます」
「ああ、よろしく頼む」
普段なら調整した剣は、その持ち主に直接届ける。調整に不具合がないか確認しておきたいからだ。でも今回は、団長経由で届けることにした。
団長も巡回騎士団の剣だからだろうと疑問に思うことなく受け入れてくれた。
……良かった。会いたくないとは思っていない、でも私達はもう会わないほうがいい。彼のためにも、何よりハルサのためにも。
さあ、仕事、仕事！　ただの剣よ、持ち主は関係ないわ。いつも通りにやればいい。私の仕事は整えることで、残存魔力が誰のだろうと関係ない。
目の前の剣に意識を集中させる。一旦、調整に入ったら雑念などなくなり、いつも通りに作業を進めることができた。念入りに仕上げると、その剣を持って席を立つ。
……これで、また明日からいつもの日常に戻れる。
気づけばもう夕方だった。この剣を団長に渡したら、ちょうど終業時刻になる。今日はハルサの好きなメニューにしようと考えながら、執務室に向かった。
――トントンッ。
扉を叩くと中から、おうっ！　という団長の声が聞こえ、入室の許可が下りる。

扉を開けると、部屋には団長だけではなく、もうひとりいた。私に背を向ける形で座っているので誰かまでは分からない。
「申し訳ありません、お客様がいらっしゃるとは知らなかったので。出直してきます」
「構わない、むしろちょうど良かった」
ちょうど良いとはどういう意味だろう。厄介な相手だから話を終わらせたかったということだろうか。団長は私が持っている剣に手を伸ばしてくる。どうやら渡してしまって構わないようだ。
「ミン団長、お待たせしました。調整が終わりましたので、剣をお届けに来ました」
「流石（さすが）、仕事が速いな。ブルーガ副団長、彼女はあなたの剣を調整した、魔道具調整師のルシアナだ。若いが調整の腕は保証する。以前より確実に良くなっているはずだ。ルシアナ、こちらは剣の持ち主で、巡回騎士団の副団長アザキオ・ブルーガだ」
何も知らない団長は、当然のように私のことを紹介する。
振り返って私を見るその人は、アザキオだった。
逃げずに立っているのは、足が動かないからだ。今私はどんな顔をしているのだろう。ちゃんと礼儀正しく微笑んでいるつもりだったけれど、自信はなかった。しかし、この場でお互いの過去を明かす必要はない。

「お初にお目にかかります、魔道具調整師のルシアナです。剣の調整は問題なく終わりました。確認していただいてもよろしいですか？」
「……ああ、初めましてアザキオ・ブルーガだ」
アザキオは私に合わせて初対面として接してくる。剣を手に取ると、自分の魔力を剣に流し入念に確認していく。その視線は剣を見ているようだが実際には違った。
剣越しに私を見ているのを感じる。変わらないその眼差しに、昔に戻ったような錯覚を抱く。
――違う、彼はもう関係ない人だ。彼だってこの状況に驚いているだけで、深い意味などない。
私はその視線に気づかないふりをする。
「ありがとう、完璧な調整で以前よりしっくりくる」
「それは良かったです。では、これで失礼します」
アザキオが確認を終えると、早口で言葉を紡ぎ、ふたりに頭を下げて退出した。急ぎ足で廊下を歩きながら、落ち着けと心の中で何度も何度も唱え、胸の鼓動を鎮める。
大丈夫だ、騎士と魔道具調整師の会話で終わった。何も不自然なところはなかったはず。アザキオは何も気づいていない。団長だって、私の個人的な事情を話すことはありえない。

巡回騎士団がこの町に滞在する期間は長くないはずだから、こちらから関わりを持たなければもう会うことはない。ただの偶然よ、もう二度と会うことはないわ。
そう思っていたのに、翌日、上機嫌なミン団長が予想もしていなかったことを告げた。
「ルシアナ、巡回騎士団の滞在中は、あちらの仕事を引き受けてくれないか。すでに机もあっちに用意してある。準備万端だから心配しなくていいぞ」
お願いのように言っているが、すでにあちらに私の仕事場まで用意してあるということは、完全に決まった話のようだ。
これは特別なことではない。困っている時はお互い様なので、他の騎士団に騎士を貸し出して協力し合うのはよくあることだ。それが今回は魔道具調整師だっただけのこと。
私的な事情を話していなかったのは私だ。だから団長は悪くない。それは十分かっているけれど……
「あれっ……、嫌だったか？　別に大変なことはないぞ、いつも通りにやればいいんだ。勤務時間内でできることだけでいいから！　残業はできないとはっきりと伝えてあるから心配ないぞ。あー、えっと……もしかして勝手に決めて怒って……る？」

私が返事をできずにいると、こんな反応をすると思っていなかったのだろう、団長は分かりやすく狼狽える。

ミン団長は普段は飄々としているが、いざという時は頼りになる人で、部下からの信頼は厚い。私も十年前からお世話になっている。子供が熱を出したら嫌な顔せずに休ませてくれるし、こんな田舎じゃ緊急事態などそうそうないと子供優先の私を普段から気遣ってくれる。そのお陰で、私は恵まれた環境で仕事ができているのだ。そんな団長を困らせたくない。

……でも正直言って受けたくない。受けるということは、アザキオとまた顔を合わせるということだ。

——自信がない。

何が？　と問われても困る、何もかもだ。冷静でいられるか、普通に接することができるのか、自分でもよく分からない。私はそんなにできた人間じゃない。

目の前に団長がいなかったら、とっくに頭を抱えて唸っていただろう。

「ほら、あっちはうちと違って魔力を持った騎士が多いから、副団長の剣を見た騎士達が羨ましがっているって聞いてな。つい嬉しくなって自慢したら、あっちの団長にお願いされちまった。本当に他意はなかったんだ！　純粋にルシアナの腕を褒めただけで……」

団長は言い訳するように言葉を続ける。その声はだんだん小さくなり、それとともに団長の大きな体もなぜか縮んでいく様子は、どこか怪しい。

「……うちの優秀な魔道具調整師を貸しますよって酒の勢いで言った気がする……たぶん」

「本当に、たぶんですか？　ミン団長」

私は疑いの眼差しを団長に向ける。ミン団長はお酒に強く、酔って記憶をなくしたことは一度もないはずだ。

「……はっきりと言っちゃいました」

団長は正直に白状して、ガバッと頭を下げる。

やはり思った通りだった、もう苦笑いするしかない。これは仕事だと割り切って、引き受けるしかないだろう。そもそもただの仕事なのだから、この状況で引き受けないと、かえって不自然だ。

「分かりました、お引き受けします」

「そうか！　ありがとう、じゃあ今日から早速頼む。もしあっちで嫌なことがあったら、すぐに言え。回収しに行くから」

「大丈夫です、子供じゃありませんから。それに回収って、私は荷物扱いでしょうか？」
団長がそう思っていないのは分かっているくせに、ちょっとだけ仕返しをする。我ながら大人気ないが、さっきの団長よりはましだろう。
「……すまん。回収ではなく、迎えに行かせていただきます」
「はい、良くできました。これからはよく考えてから発言してくださいね」
「……はい」
やり取りを続けるほど団長の体は小さくなっていく。それを見て、ちょっとだけスッキリしたのは内緒にしておこう。
こうして巡回騎士団に行くことが決まった私は、仕事に使う道具を手早く準備する。念のために、家から指輪を持ってきておいて正解だった。これはハルサと一緒にお祭りに行った時に、あの子が屋台で買ってくれたおもちゃの指輪だ。
『僕の目の色と同じだよ。お母さん、嬉しい？』
『すごく嬉しいわ！　ありがとう、大切にするわね』
硝子（がらす）の指輪は一見、おもちゃではない。とても大切な宝物で、私にとって唯一の指輪だ。
こんなふうに役に立つ日が来るなんて思ってもいなかった。未婚の私は、いつもは指

輪をしていないが、左手の薬指にそっとはめてからその手を掲げる。どこから見ても、結婚指輪にしか見えない。
よしっ！　と小さな声で気合を入れてから、巡回騎士団が滞在中に使っている建物に向かう。
町の騎士団の建物から、歩いて十五分。建物の前にはひとりで立っている騎士の姿が見える。
「引き受けてくれてありがとう。仕事場に案内しよう」
それはアザキオだった。どうやら私のことを待っていたようだ。
「これが私の仕事ですから。短い期間ですがよろしくお願いします」
お互いにどう接するのが正解なのか、決めかねているという感じだった。変に丁寧すぎても周りが訝（いぶか）しむだろうし、だからといって以前と同じにはなれない。ぎこちない雰囲気が漂い、引き受けたことをもう後悔し始めていた。
巡回騎士団が使用する建物を案内しながら、アザキオがポツリと呟く。
「魔道具調整師を続けていたんだな。てっきり違う仕事に就いているのかと思っていた。……届け出がなかったから」
「ここで十年前から働いているけれど、臨時という形だから正規ではないの」

魔道具調整師を正式に雇うと、雇い主が届け出を出す決まりになっているが、私は臨時雇用だからその必要はない。

「そうだったのか。だからこの十年間どんなに届け出を確認しても名前がなかったんだな。……元気そうで良かった」

昔と変わらず優しい声音だった。あんな別れ方をしたからこそ、ずっと気にかけていたに違いない。私が絵に描いたような悲惨な人生を送っていたら、寝覚めが悪い。だから、最後の言葉に心がこもっていたのだろう。

「この通り元気よ。この土地は私に合っているみたい。ここに来て良かったと思っているわ」

彼の罪悪感をなくしてあげるために言っているのではない、全部本当のことだ。ここに来てから今まで後悔したことはない。アザキオの視線が私の左手で止まる。

「……その、今は家族がいるんだな」

彼は私が結婚したと思っているのだろう。予想通りの反応に、私も用意していた言葉を返す。

「素敵でしょう。似合うからって買ってくれたの。私にも家族ができたのよ。あなたも幸せそうで良かったわ」

嘘はついていない。私には素晴らしい息子がいるし、指輪だってあの子が買ってくれた。

彼の視線が指輪に注がれたままなのに気づく。この色が気に食わないとでも言いたいのだろうか。アザキオの瞳と同じ色だが、これはハルサの色で彼のではない。同じ色でも全然意味が違う。文句を言われる筋合いもない。

でも、彼はこの真実を知る必要がないから伝えない。

私が怯むことなく彼に視線を向けると、一瞬気まずそうな表情をして彼はすぐに目を逸らす。勝ったとか負けたとかではないけれど、なんだか勝った気になり気分が良かった。

チラッと彼の左手の薬指を見ると、そこには十年前にはなかった指輪がある。彼は結婚して離縁をしていないということだろう。もう深入りするような関係ではないから、彼が巡回騎士団として今ここにいる事情は聞かなかった。

なんとなく、距離感が掴めてきたような気がする。当たり障りのないことを、こんなふうに話せばいい。

巡回騎士団の滞在期間は、三週間ほどの予定だと聞いているが、なんとかなりそうだ。

あとはハルサが彼と会わないように、気をつければいい。そもそも、巡回騎士と学校

に通っている子供が会う確率は高くない。
身構える必要はなかったのかもしれない。表情には出さずに安堵していると、用意された仕事部屋に着く。
「ブルーガ副団長、案内ありがとうございました」
「……っ……いや、キオと……、なんでもない。何か足りないものがあったらすぐに用意するから遠慮なく言ってくれ、ルシアナ」
私は彼を役職で呼び、彼は私をルシアナと呼んだ。副団長と派遣の魔道具調整師なら、立場は彼が上だからお互いにこの呼び方で正しい。……彼が言いかけた言葉は聞かなかったことにする。もしアナと呼ばれたら、私は笑顔を浮かべてごめんなさいと告げて、鞄を投げつけていただろう。
とにかく、お互いの関係性をはっきりさせたことで、私の不安は薄らいでいった。きっと彼も同じ気持ちでいるだろう。今さら過去のことを周囲に知られて良いことなんて、お互いにひとつもないのは分かり切っている。利害が一致しているなら、問題は起こらないはずだ。
その後、アザキオは私のことを魔道具調整師として巡回騎士団の騎士達に紹介してくれた。みな私のことを歓迎してくれて、我先にとそれぞれ剣を差し出してくる。思って

いた以上に、魔力を持つ騎士が多いようだ。
「おい、俺が先だ！」
「いいや、俺の剣のほうが調子が悪い！　人間でいったら重症患者だ」
「いやいや、年長者を敬え。つまり俺が先だ」
……やかましいっ！　いい年した大人のくせに、押し合いながら言い争いを始める。本当にどうして騎士達はどこでもこうなのだろう。体力があるからか無駄に元気すぎる。
こんな状況には慣れているから動じはしない。パンパンッと手を叩き、みなの注目を自分に集める。
「順番はくじ引きで決めます。文句を言う方は最後です！」
叫んでいた騎士達はピタリと静かになる。
「みなさん、理解が早くて大変助かります」
「「……」」
満面の笑みでそう言うと、騎士達は無言のままうんうんと頷いている。
なかなか素直な騎士達だ。これなら職場の人間関係で悩むことはなさそうだとホッとする。こうして巡回騎士団での初日は思ったよりも、良い滑り出しで始まった。

それからあっという間に一週間が経った。仕事も人間関係も順調で、アザキオとの接触も必要最低限で済んでいるからなんの問題もない。ミン団長も様子を気にして、時々顔を出してくれる。

「どうだ？　窮屈な思いはしていないか？　もし大変なことがあったら遠慮しないで言ってくれ。ちゃんと対応するからなっ！」

「みなさん、良い人達ばかりですから快適に仕事はできていますよ」

「そうか、良かったー。なんかあったら、またルシアナに怒られるところだった」

「……」

最後の一言は余計だ。心の底からホッとした様子のミン団長は、どうやらこの前のことをまだ気にしていたらしい。

「団長、私ってそんなに怖かったですか？」

笑いながらそう尋ねると、団長は必死になって首を横に振る。否定の仕草だが、怖かった‼　という心の叫びはしっかりと伝わってきた。その様子を見て、今度からは気をつけようと少しだけ反省をする。

「……ところで、今日は午前中で仕事を上がる予定だろ？　いいのか、もう昼過ぎているぞ」

「きりの良いところまで終わらせて帰るつもりです」

今日は午前中でハルサの授業が終わる日だった。そういう時は、私も午前だけ働くことにしている。近所の人はいつでもハルサを預かるよと声をかけてくれるし、本人もお留守番くらいもうできると言っている。だから本当は休まなくても大丈夫だろうけれど、なるべくあの子との時間を私は大切にしたい。

それに、ハルサの親は私しかいない。父親の代わりになれなくても、愛情だけは目に見える形でふたり分以上注いでいこうと思っている。

「そうか、なるべく早く帰ってやれよ」

「はい、そうします！」

私は急いで残りの作業を片付けてから、お先に失礼しますと建物を出た。

ハルサはもう学校から帰っているだろう。鍵は持っているけれど、もしかしたら近所の家にお邪魔しているかもしれない。みんな我が子や孫のようにハルサを可愛がってくれていた。私が帰宅していない時は、誰かしら声をかけてくれるのが当たり前になっている。

以前そのことについて私がお礼を言うと、好きでやっていることだからと誰もが笑ってくれたのだった。

いつもの道を急ぎ足で帰っていると、午後の学校がないからか、子供の姿が多かった。この町は治安がよく、明るい時間帯なら子供がひとりで歩いているのは普通だ。

その時、ハルサによく似た髪色が目に飛び込んでくる。あの子の髪色が珍しいわけではないけれど、この土地ではあまり見かけないものだ。後ろ姿もあの子によく似ている、そして服も。

すべてが似て、……いや同じだった。愛しいハルサを見間違えることなんて絶対にない。

「そんなはずない、あの子のはずがない……」

見間違いだと自分に言い聞かせる。そう否定しなければいけない理由があった。

なぜならその子の隣には、騎士服姿のアザキオがいたから。ふたりで話しているように見える。

なんで……、どうしてっ！　あと二週間でいつもの日常が戻ってくるはずだったのに。

「あっ、お母さんだ！　お帰りなさーい」

ハルサは私に気づいたようで、顔をほころばせる。屈託のない笑顔に元気な声。いつもと変わらない我が子の様子に安堵するが、不安は消えないままだ。

私は不安な顔を見せまいと必死で作り笑顔を浮かべるが、どうしようもなく泣きたく

なってしまう。

アザキオもそんな私を見ている。彼の目に映る私は、ちゃんと笑えているだろうか。

ふたりで何を話していたのだろう。

いや、正しくはアザキオは何を知ったのだろう。それとも、何も知らないままなのか……

感情のままにアザキオを問い詰めれば不審に思うかもしれない。最悪、墓穴を掘ることになってしまう。だから慎重にならなくては……

アザキオへの苛立ちを隠し、ハルサと目線を合わせるためにしゃがむ。

「ハル、どうしてここにいるの？　家で待っている約束だったでしょう！」

怒っているわけではないが、焦ってきつい口調になってしまう。

しまったと思ったけれど遅かった。ハルサから笑顔が消え、泣くのを我慢している顔になる。

「お母さんが帰ってこないから迎えに来たの……近道は使わないで、ちゃんと決められた道を通ったよ。この前、迎えに行った時は喜んでくれたから、いいかなって思ったんだ。……ごめんなさい」

ハルサの言う通りだった。今日だって、この子の隣にアザキオの姿さえなければ、優

しく抱きしめその頬に口づけをしていたはずだ。この子は何も悪くない。それなのに私ったら何をしているのだろう。ハルサにこんな顔をさせて……

不安に駆られて、それを子供にぶつけるなんて最低だ。しっかりしろ、私っ！

動揺する自分に活を入れる。今まで何があっても乗り越えてきた、これからだってそれは変わらない。守りたいものがある限り強くなれる。

「ごめんね、怖い言い方をして。お母さん、ハルが知らない人と話していると思ったから、ちょっとびっくりしちゃったの。ほら、可愛いから誘拐されたらって急に心配になっちゃって」

「お母さん……」

下手な言い訳をしながら優しく抱き寄せると、ハルサはギュッと抱きついてくる。嗅ぎなれた愛しい我が子の匂いに、ざわついていた心が少しだけ落ち着く。

「もうっ、そんな心配いらないのにー。僕はもう大きいんだから、知らない人についてなんかいかないよっ！」

私が怒っているわけじゃないと分かって、ハルサにいつもの笑顔が戻る。わざと拗ねたような言い方をするところが、まだまだ子供らしくて可愛い。これでいい、やっぱりこの子には笑顔が一番似合う。

「分かっているわ、本当にごめんね」

「いいよ、お母さんだから特別に許してあげる。でも今日のおやつはたくさんがいいなー」

「はいはい、ちょっとだけ多めにするわね」

ふたりで顔を見合わせてクスクスと笑う。いつもの日常が戻ってその場が和む。そのやり取りを黙って見ていたアザキオが声をかけてくる。

「ルシアナ、やはり君の子だったんだな。そうかと思ってつい呼び止めてしまった。俺から一方的に話しかけたんだ。その子は悪くない、叱らないでやってくれ」

ハルサのことを思って、庇(かば)うような言い方をしたのだろう。

善意からかもしれないが、なんだか腹立たしい。そんなこと言われなくとも分かっている、この子は私の子だ。

ハルサは落ち着かない様子で、私をちらちらと見てくる。その顔は何かを言いたそうだった。

「……あのね、僕がよそ見してて、おじさんにぶつかって転んじゃったの。そしたら助けてくれたんだ。そのあと、お母さんの名前がルシアナかどうか聞かれたけど、僕、知らない人と話さないって約束をちゃんと守ったよ。頷いただけで何も言ってないもん。

立ち読みサンプルはここまで